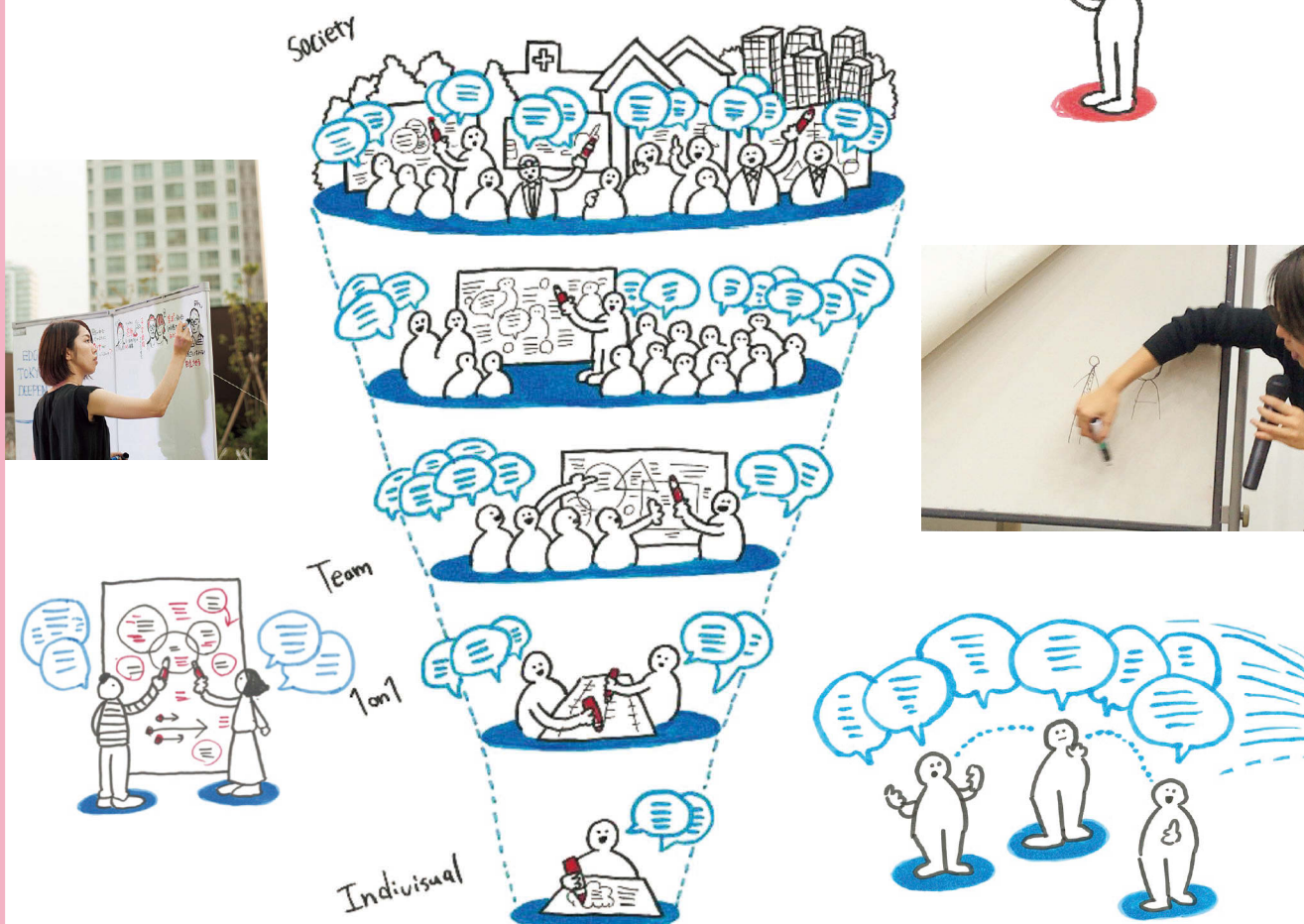


[特集]

感情・関係・状況を可視化できる グラフィックレコーディングの インパクト

なぜこのツールは希望を生み出すのか



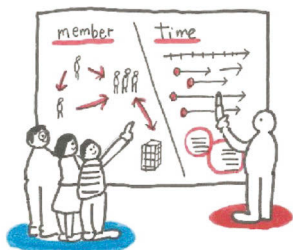
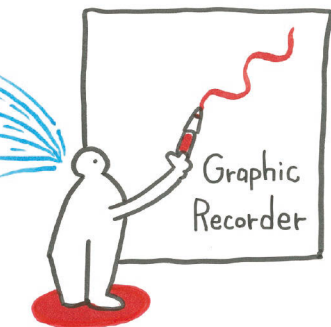
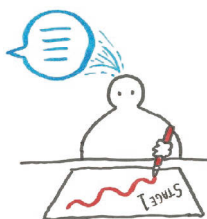
この特集は、《2018年国際カンファレンス「コ・デザインと当事者研究」》*の2日目に行われたワークショップ「グラフィックレコーディング」(主催:東京大学先端科学技術研究センター当事者研究分野)から一部抜粋し、加筆をしたものです。

*2018年11月2・3日 東京大学駒場IIキャンパスにて。

共催: 在日米国大使館。



Graphic Recording



ホワイトボードに描くという光景は、べてるの家が始めた「当事者研究」と切り離せないものです。

私と共同研究者の綾屋さつきさんは、なぜ当事者研究には、こんなにも当事者が行き詰った状況をドラスティックに変える効果があるのだろうということを研究しているのですが、そのなかでわかってきたのは、どうやら「ホワイトボードに描く」という点にも、何か秘密がありそうだと、いうことでした。

当事者研究にとって、そもそもホワイトボードを使うというのはどんな意義があるのか。考察してみると、1つは「情報保障」だろうと。情報を共有する時に、ホワイトボードがあることで、ついていけない人を少なくするという効果があると言えます。

もう1つの意義は、ホワイトボードがあることで、当事者研究の極めて重要なエッセンスである「外在化」という現象を引き起こしているのではないかと、いう点です。

当事者研究では、「ホワイトボード」「ファシリテーター」「当事者」の三者が三角形を作る状態が、外在化の準備状態なんだということを言います。

ホワイトボード上に本人の苦勞を描き、本人自身はそれを“研究者の視線”で眺める。そして傍らにファシリテーターがいるというのもミソなのですが、ファシリテーターも、視線を本人に注ぐのではなくて、ホワイトボードに注ぐ。

つまり両者ともにホワイトボードに視線を注ぐ、その時に、本人と、本人の苦勞を切り離す外在化が発生するということです。ですからホワイトボードはそれを生じさせる重要な仕組みになっていると私たちは考えています。

最近「メタ認知」という言葉をよく聞きますが、メタ認知は、本人にとっての現実と一緒にながめてくれる、もう1人の仲間がいて、初めて発生するのかもしれないということです。1人でトレーニングできるようなものではなくて、外在化は2人から起きる、というのが、べてるの家のホワイトボードの実践が教えてくれたことかなと思っています。

本日は、そんな大事なホワイトボードの役割が、グラフィックレコーディングを学ぶことによって補完・強化されるのではないかと期待をもって、このカンファレンスを開きました。このスキルをみんなで学び、高めるための会にできればと思います。よろしくお願いいたします。



司会：熊谷晋一郎さん

(東京大学先端科学技術研究センター准教授)

